台湾大学と東北大学との交流関係締結に寄せて

陳維昭

古代賢者が喩えた光陰とはよく言ったもので、仙台より台北に戻り、早いものでもう二十五年という長い歳月が瞬く間に過ぎてしまいました。この間、医学会や医局関係の会合などに参加するために数回、東北大学を訪れてはいました。

昨年(西暦二〇〇〇年)十一月に仙台へ訪れたのは、台湾大学の代表として、東北大学阿部総長との間で両校の交流協力関係樹立に関する協議書に署名するという大事を目的としたものであり、私個人としても最も意義深いことでした。

私は一九七二年に、日本政府の奨学金を受け東北大学へ研究に参りました。当時、私は台湾大学医学院を卒業して六年余りで、台湾大学付属病院の住院医師や医局長を歴任し、渡日の頃は、台湾大学付属病院の主治医師として働いておりました。

実は、日本留學前、外科の許書劍教授が日本へいらっしゃるのに同行し、大阪の万国博覧会を参観し、その足で東北大学を訪問したことがありました。その時、初めて葛西教授に御目にかかれる機会に恵まれ、東北大学の思い出がしっかりと心に深く刻まれたのでした。それがきっかけで、葛西外科で小児外科を研修しようと決心したのでした。

一九七二年四月、仙台の地に降り立った時は、 まだ突き刺すような寒さが残っており、物寂しさを感じました。寒さや生活習慣に徐々になれつつあった同年十月のある日、テレビが突然、日台両国国交断絶のニュースを伝えました。

突然、舞い降りた悪夢にも似たこの変化には、在日留生も一時、呆然となりました。どう対処すべきか知る由もなく、ただただ未来への不安から今後どうなっていくのだろうか、政策はまた変化するのだろうか、奨学金の継続問題はどうなるのだろうかなど、心配が募るばかりでした。幸いにも日本政府の各施政には変化もなく、学校当局や同僚たちも心遣いや優しさを示してくれました。留学生は、心から日本政府の温情と人々の厚情に深く感謝の念を抱きました。

台湾大学付属病院へ復職後、日台の医学会には密接な関係があり、互いに交流が盛んであることを初めて知りました。一九九三年の学長選に当選を果たし、台湾大学の学長に就任してからは、積極的に術交流を進め、アメリカやカナダの他、オーストラリア、ヨーロッパ及び周辺アジア諸国にまで対象を広げました。

私は日本留学経験を持つ最初の台湾大学の学長であるため、特に日本の大学と協力関係を結ぶべく努力しようと思っておりました。しかし、日本政府が、日本の国立大学と台湾の国立大学との間で如何なる正式な関係をもつことも、また日本の国立大学の学長及び教授が台湾を正式訪問することも、禁止したのを知りました、このため、日本との学術交流は阻害されたのでした。これは、中国大陸との立場を日本政府が考慮した現れでしょう。

とはいえ、一九九四年、私は台湾大学の同僚を連れ、北京へ参り、北京大学と両校交流協議書に署名いたしました。当時の中国国家教育委員会副主任委員であり、また現在の教育部副部長である韋鈺女史がその時、一席設けてくださり、台湾大学と北京大学両校の学術交流を歓迎してくれました。ですから、先の政策を知った時は、日本政府のこのようなやり方はなかなか納得のいくものではありませんでしたし、残念でした。

幸いに三、四年前、日本政府はやっと開放政策を採るようになり、台湾大学もこれを受け、早速、東京外国語大学をはじめ、お茶の水女子大学、東京工業大学、東京大学、北海道大学などと積極的に交流関係を結びました。

このような経緯を経て、今回、私の古巣である仙台に戻り、我が母校である東北大学と交流関係締結協議書に署名出来ることは、長き冬季を終え春を迎えたような形容し難い感無量の気持ちでいっぱいでございます。結局、政治は政治に帰し、学術もまた学術に帰すというのは、世界共通の真理なのだなあと実感しております。(東北大学『まなびの杜』No.16 から転載,2001 Summer)

台灣大學與東北大學簽約之感想

陳維昭

離開仙台回到台北，轉眼已歷二十五個寒暑，其間雖也曾為著參加醫學會或醫界的活動而數次回到東北大學，但是去年（2000）11月回到仙台，代表台灣大學與東北大學阿部總長簽署兩校合作交流協議書之事，最是令我感到意義重大。

我是在1972年獲得日本政府獎學金到東北大學進行研究，當時我從台灣大學醫學院畢業已有六年餘，擔任過台大醫院的住院醫師、總住院醫師，出國當時是台大醫學院的兼任講師，由於在此之前曾隨同外科許書劍教授赴日參觀大阪博覽會並拜訪東北大學，會見葛西教授，對東北大學留下良好的印象，因而決定到葛西外科研修小兒外科。1972年4月抵達仙台時，仙台仍然籠罩在刺骨的寒冷之中，顯得格外蕭瑟，正在逐漸適應寒冷的氣候和生活習慣之間，同年10月的某一天電視上忽然播出日台兩國斷交的消息，這突如其來的變化讓許多留日學生一時人心惶惶，不知所措，不知未來的發展會是如何？政策是否會有所改變，獎學金是否會繼續等等，幸好此後日本政府的各項措施並沒改變，學校當局及同事們也如往常的關心體貼，留學生莫不為日本政府的德意及人民的親切而感念不已。

回到台灣大學醫學院服務之後，發現日台醫學界之間關係相當密切，彼此之間交流非常頻繁。1993年我獲選擔任台灣大學校長後，積極拓展學術交流，除了美國、加拿大之外，更擴及澳洲、歐洲及鄰近的亞洲諸國，由於我是第一位具有日本留學背景的人擔任台大校長，因此必然更積極致力於與日本大學之間的合作關係，這時才得知日本政府禁止日本國立大學與台灣的國立大學之間建立任何正式的合作關係，日本國立大學校長及教授也不得來台做正式訪問，因而使得對日本的學術交流受到阻礙，據說這是因為日本政府顧忌中國大陸立場的關係。然而早在1994年我就曾帶領台灣大學同仁到北京，與北京大學簽署了兩校的交流協議書，當時中國國家教育委員會副主任委員，也是現任的教育部副部長韋鈺女士曾設宴接待，對台大、北大兩校之間的學術交流表示歡迎，因此泱泱大國的日本政府此種作為著實令人不解。所幸，在三、四年前日本政府終於採取開放政策，台灣大學也很快地就與東京外國語大學、東京工業大學、東京大學、北海道大學等建立了合作交流關係。因此，此次舊地重遊回到仙台，與母校東北大學簽署交流協議，格外感到欣慰，到底政治的歸政治，學術的歸學術，是普世共同的道理。Ω（原載於東北大學《まなびの杜》No.16,2001 Summer）